

学校法人光華女子学園

2024年度事業計画書



健やかな明日が華ひらく

目 次

I. 経営方針

1. スローガンと校是と人材育成
2. 2024年度経営方針策定にあたって
3. 2024年度経営方針の基本
4. 2024年度経営重点項目
5. 2024年度経営方針数値目標

II. 主な事業計画の概要

(1) 大学院・大学・短期大学部

(1) 光華一貫教育の創造

- ① 建学の精神に基づく宗教教育
- ② 京都光華高等学校との高大接続
- ③ 幼・小・中・高を含む併設校への支援と連携

(2) 教育・研究の質・体制の充実

- ① 学部・学科・研究科等の将来構想
- ② 基幹研究の展開（研究力の向上、人材育成支援事業の獲得）
- ③ 学修・学生支援体制の向上
- ④ 光華独自の教育・指導法（光華メソッド）の確立
- ⑤ 他大学との連携（共同授業・研究等）の強化
- ⑥ 就職・キャリア開発・地域連携への支援強化
- ⑦ 研究支援体制の充実
- ⑧ キャンパスのグローバル化の推進
- ⑨ 図書館・真宗文化研究所・カウンセリングセンター・人権啓発センター
光華もの忘れ・フレイルクリニックの事業計画

(3) 経営基盤の強化

- ① 志願者増につながる戦略的募集・広報活動
- ② ガバナンスコードの策定と運用
- ③ SD実施強化の検討
- ④ 大学・短大における基金の設立

(2) 高等学校・中学校

(1) スローガンと校是と人材育成

- ① スローガン：「ワクワク感を追いかけよう」
- ② 校是：「Students & Parents Satisfaction の向上」
- ③ 人材育成：「思いやりの心と創造力を兼ね備えた人材の育成」

(2) 光華一貫教育の創造

- ① 建学の精神に基づく宗教教育
- ② 体験・探究学習×教科学習×Edtech
- ③ 言語活動と異文化理解教育

(3) 教育研究体制・質の向上

- ① 教育体制・運営体制、研究体制、中学校・高等学校のコース改革のあり方
- ② 働き方改革に向けて
- ③ 教育研究の充実

(4) 経営・運営基盤の強化

- ① 志願者増・入学者確保につながる戦略的募集・広報活動

(3) 小学校

(1) 光華一貫教育の創造

- ① 建学の精神に基づく宗教教育
- ② 幼・小・中・高・大の連携
- ③ 英語教育（国際理解教育）のブランド化

(2) 教育研究体制・質の向上

- ① 教育体制・運営体制、研究体制のあり方
- ② 組織運営
- ③ 働き方改革に向けて

(3) 教育環境の充実

- ① ハード面、ソフト面での環境整備

(4) 経営・運営基盤の強化

- ① 志願者増・入学者確保につながる戦略的募集・広報活動
- ② 収支改善に向けて

(4) 幼稚園

(1) 光華一貫教育の創造

- ① 建学の精神に基づく宗教教育
- ② 体験・探究型学習とEdTechを活用した新たな保育

(2) 教育研究体制・質の向上

- ① 魅力ある光華教育の構築
- ② 満3歳児保育の充実・拡大と将来構想
- ③ 気ある教職員体制づくり

(3) 教育環境の充実

- ① ハード面、ソフト面での環境整備

(4) 経営・運営基盤の強化

- ① 志願者増・入園者確保につながる戦略的募集・広報活動
- ② 小学校への内部進学者増につなげる幼小連携の充実

(5) 学園

(1) 中期計画「The Road to 2030－ACT1」の事業計画実施と進捗管理（KPI管理）

(2) 2024年度事業活動収支の改善

(3) 補助金・助成金と寄付金、資産運用益の獲得

(4) 事務局の組織再編と職員力の強化

(5) 学園ガバナンス・コンプライアンスの強化

(6) NPO法人（京都光華アカデミック&スポーツクラブ）の事業展開

(7) 各種団体との連携

Ⅲ. 施設・設備等整備事業

- 1. 施設整備計画**
- 2. 設備整備計画**
- 3. ICT教育環境の整備**

Ⅳ. 2024年度予算

- 1. 2024年度事業活動収支予算**

I. 経営方針

1. スローガンと校是と人材育成／

スローガン	温故創新
校是	Students & Parents Satisfaction の向上
人材育成	思いやりの心と創造力を兼ね備えた人材の育成（人材育成が本学園の使命）

2. 2024 年度経営方針策定にあたって／

(1) 現状認識

これまで光華ビジョン 2030 実現に向け中期計画（ACT）に基づき 4 年間取り組んできたが、残念ながら 2024 年度の入学者測は **690 名**（925 名→758 名→789 名→648 名→690 名）となる見込みである。2023 年度は学園存亡の危機と宣言し、教育改革と募集広報活動に取り組んだがその成果が表れているとは言い難い。この水準の入学者数が続けば支払資金の増減額は 2024 年度以降 **▲494→▲694→▲545→▲573→▲594 百万円**と予測され、まさに学園存亡の危機が現実のものとなる。

【成果が表れない理由として考えられること】

- ①人口減
- ②女子中高、女子大希望者の減少と短大希望者の減少
- ③他私学の改革成果（通信教育（高大）、共学化、学部・学科の新設・改組、定員増、社会実装など）
- ④教育成果の低迷（就職率、進学実績、資格・採用試験合格率、退学率、成長度が競合負け）
- ⑤社会や・志願者などの学外ニーズの把握・対応不足（学内論理での改革やスピード感不足）
- ⑥募集広報活動の停滞（コロナ禍での活動の積み上げ不足、訴求ポイントの把握不足、エビデンス不足など）
- ⑦学内のコミュニケーション不足（検討への参画、意思決定プロセス、組織マネジメント、目標設定・共有など）

一方、ここ数年に取り組んだ改革の中にも、成果が表れだしてきたものや今後成果が期待できそうなものもある。幸い先人のご苦勞により作られてきた資産によってこの苦境を乗り越える猶予期間がある間に、これらの成果を確かなものとしていかねばならない。そしてさらに**抜本的な改革に勇気をもって取り組まなければならない**。ピンチはチャンスでもあり、2024 年度と 2025 年度は学園再興につなげるための重要な年である。

【成果が表れだしてきたもの、今後成果が期待できそうなもの】

- ①大学における社会実装（機能性食品開発、こども食堂、わくわく健やかフェス、外部との連携協定など）
- ②作業療法専攻（1 期生：23 名）、歯科衛生学科（1 期生：52 名）
- ③新棟（光耀館）
- ④和順館やグラウンド
- ⑤中高におけるコース体制の修正やクラブ活動実績
- ⑦小学校における「安心感のある楽しい学校」創り（授業改革、募集イベント改革、教職員の一体感など）
- ⑧幼稚園における 2 歳児接続保育導入準備と 1 歳児預かり保育開始またはこども園移行に係る検討開始

(2) 基本的な考え方

2024 年度は検討中または未着手であった改革を具体化するとともに、これまで取り組んだ改革の芽を着実に育て、**ワクワク感漲る学園創り**を着実に進めていきたい。具体的には、人材育成が使命である本学の原点に立ち返り、特に高校や大学において育成する人材像を明確にし、「Well-Being の実現に向けた健康・未来創造キャンパス」という光華ブランドを確立させたい。そして魅力ある教育を創造し、着実にその人材像に沿った卒業生を送り出そうとしている意欲を感じ取っていただくことで新入生数の増加を実現させ、**学校に明るさと活気を取り戻したい。**

これらのことを実施することは必須であるが、それだけで人口減や女子中高・女子大・短大離れを乗り越え、改革を進める他私学との競合に打ち勝つことができるかを考えたとき、現状の本学園の募集力を考えるとかなり厳しい現実が待ち受けていると言わざるを得ない。特に大学における 18 歳人口が急減期を迎える 2028 年以降、これらの改革を実施するだけで生き残ることは容易なことではないと考える。

その最大の要因は、「女子のみ教育」に対する抵抗感が我々の思っている以上に強いことであると考え。抵抗感が強い理由として、ジェンダー平等が進み、多様性が浸透してきた現代の若者（特に高校生以下）には、これまで女子のみ教育の良さとして訴えてきたことがなかなか受け入れられず、女子のみ教育がなぜ良いのか、女子のみ教育の利点や育成する人材像は何かを女子中高大側が提示できていない現状があると考え。

【本学の女子のみ教育の目的】

女子に対する学習機会の確保 ⇒ 2023 年度大学入学者の進学率 男子：60.7% 女子：54.5%

※既に達成できていると考えられる

【育成する人材像】

良妻賢母 ⇒ 質の高い総合職・一般職・専門職

※男女の違いがなくなっている（男女共同参画社会が浸透）

【女子のみ教育の利点】

男女の特性の違いに応じた指導方法を実践 ⇒ 男女の違いではなく個人差

ただし、女子のみ教育に対して全く理解者がいないわけではない。具体的な目的や利点ではなく全体的な雰囲気、女子のみ教育の場における落ち着いた環境や安心感に期待されている方々も一定数はいるが、女子中高大の充足率をみると大規模ブランド校が合格ラインを下げて定員確保をはかっている現状から、それ以外の学校の定員を充足させるほどの人数ではないことは明らかである。

一方、ジェンダー平等や多様性の理解が進んだ現代社会においても「ガラスの天井」という言葉に象徴されるとおり、まだまだ男性中心の文化が残っている。この背景は、既に女性の実力不足ではない。この文化を変える若い人材（これまでの社会文化に染まらない人材）を育てるのが、女性活躍実現としての今後の建学の精神の具現化ではないだろうか（女子校、女子大が共学化することで、女性活躍の視点を男性にも教育できる利点を活かした学校創り）。

創設から続けてきた女子のみ教育を転換させることは学園はじまって以来の大改革ではあるが、その実現に向けて歩みを進めなければ学園の将来はないのではないかという強い危機感のもと、**男女共学化実現に向けた課題を整理し、女子教育の新たな姿を女性活躍推進と再定義し、女子中高、女子大が共学化したからこそできる新たな学校創りを進めるべく、その準備をはじめることが必要と考える。**

(3) 経営改善に向けて

低迷する現状を打破し、学園創立 90 周年そして 100 周年に向け歩みをすすめるためにも、**2026 年度に中学、高校、短期大学部、大学、大学院において男女共学化**をはかる抜本的な改革に着手したい。そのためにクリアせねばならない課題を解決し、**必ず成功させるという決意**のもと準備をすすめる年とする。ただし、男女共学化すればすべて解決するわけではない。これまで本学が低迷してきた原因をしっかりと反省し、その上で上記のとおり、検討中または未着手であった改革を具体化するとともに、これまで取り組んだ改革の芽を着実に育てなければならない。全教職員が協力し、ワクワク感漲る学園創りに一丸となって取り組むことで収支改善基調に乗せ、**2027 年度には黒字化が実現できる目途を立てる年度**としたい。そのためにも男女共学化準備に加え、以下の 4 本柱で経営改善に努める。

①学内コミュニケーションの活発化

教職員間、組織間、学校間におけるコミュニケーションを強化し、教職員の一体感を醸成する

②教育改革と募集広報強化

魅力ある教育の創造と募集広報活動を最優先事項とし学生生徒等の募集状況を改善させる

③コストカットの強化

収支改善（黒字化）基調が確実なものとなるまでは支出（経費、人件費）抑制策を実施する

④スクラップ&ビルドの推進

どうしても学生生徒等が集まらない組織やコストオーバーになっている組織は縮小、廃止、統合する

新入生の推移と 2025 年度の目標

	2019	2020	2021	2022	2023	2024 (予測)	2025 (目標)
大・院・専	553	520	440	425	393	356	460
短大	93	101	55	82	56	118	130
高校	140	143	122	139	95	85	125
中学校	36	43	35	44	27	36	45
小学校	29	45	39	32	34	50	55
幼稚園	71	73	67	67	43	45	50
計	922	925	758	789	648	690	865

3.2024 年度経営方針の基本／

(1) 光華ビジョン 2030 と ACT（中期計画）で具体化した光華ブランドの再確認

経営理念	光華教育に対する信頼性の堅持と社会への貢献	建学の精神を体現する女性の輩出と社会での活躍
経営目標	知性豊かで品位のある女性を育む教育と先進的な教育の融合が評価され、ワクワク感が漲る地域のプラットフォーム校として認知される総合学園	人と人をつなぐ光華人材の育成 光華が核となる地域創生
経営戦略	Society5.0 時代を切り拓き SDGs の実現を担う光華教育	光華一貫教育の創造（宗教、英語、教育手法） 教育体制・質の向上 教育環境の充実 経営・運営基盤の強化
光華ブランド	人々の健康と未来を創造する学園（健康・未来創造キャンパス）	Well-Being for future

(2) 「当たり前のことができているのか」という基本の再確認

①教育

- ◇建学の精神を意識し、学生生徒等ファーストで、楽しく、成長を実感できる学校創りに取り組んでいるか
- ◇学生生徒等がワクワクする人材育成目標（DP）、教育課程、授業内容となっているか

②点検（PDCA）

- ◇計画したことをやりきれているか、進捗管理ができているか、結果分析をもとに改善策を策定できているか
- ◇学校・授業評価や資格取得、進路等の教育成果を管理し、改善に向けた取り組みができているか

③組織文化

- ◇主体的に提案し、実施し、成果を上げる文化になっているか（部下任せ、管理職任せになっていないか）
- ◇スピード感を持って的確に業務に取り組んでいるか（検討だけ、先送りしていないか）

(3) ワクワクする教育の創造（学部・学科・専攻・コース・教育課程・プログラム等）

- ①これからの社会ニーズに合致した**人材育成目標**への改定と先進的・挑戦的・具体的な**教育の特色創り**
- ②学生生徒等の興味関心をかきたて、学びが確かなものとなる**新しい授業スタイル**への挑戦
- ③本学の教育・研究成果が実社会に活かせることを証明する**社会実装**の積極的実施
- ④DX を活用した**教育成果の可視化**（ブロックチェーンを活用した学習履歴管理等）
- ⑤さまざまな対象者に対応する**新たな学習スタイル**の模索（通信教育、滞在型施設活用等）

(4) 募集広報活動の強化

2025 年度は必ず 2024 年度以上の新入生を迎え、2026 年度からの男女共学化に繋げたい（新入生数が下がり続けて共学化に踏み切るのではない）。

- ①対象学校、塾等との信頼関係作り
- ②訪問活動による市場調査の徹底と得た情報による学校創りの推進
- ③訪問時やガイダンス等での PR ポイントの精査
- ④O/C や説明会への来校者増と出願率の向上（大短： 中高： 小学校：）

⑤協定校等の開拓

(5) 地域に愛され、応援していただける学校創り

- ①西京極周辺地域、右京区、京都市、京都府と共生する学校創りの推進
- ②学園の知見を地域に還元する地域連携・社会実装や学校開放イベント等の積極的実施

(6) 次世代を担う教職員の育成

- ①光華女子学園並びに各設置校の**中核となる教職員の育成と募集（招聘）**
- ②建学の精神の具現者（自己を問う（自分の姿をあきらかにしようとする）心がけ）としての教職員の育成

4.2024 年度経営重点項目

(1) 2026 年度男女共学化（中学、高校、短期大学部、大学、大学院）の準備

中高及び大短院に分け準備室を設置し、共学化を成功させるためにクリアしなくてはならない課題を整理・解決し、準備を進める。スケジュールは以下の通り。

2024.3	理事会・評議員会で 2026 年度からの男女共学化の方向性を承認
2024.4	男女共学化準備室（中高／大短院）
2024.4～5	各校園教職員への男女共学化に関する説明と意見交換
2024.12	理事会・評議員会で最終審議 ※準備室での準備状況を踏まえた最終確認
2025.1～3	在籍者・保護者への説明 ⇒ 外部への発表 ⇒ 募集開始 ※同窓会には在籍者・保護者への説明後、報告（同年に開催される総会で改めて報告）

※男女共学化について、最終審議は 2024 年 12 月の理事会・評議員会にて行う予定であり、それまでは外部への情報提供等は行わないこと。なお、募集活動に際しては、共学化も含めてさまざまな改革について検討している旨は伝えること。

(2) 大短院専

【教育・研究改革】

- ①仏教精神を基盤とした文理統合人材育成の具体化（AI・デジタル化へ対応できる人材育成）
- ②既存学部学科改革（ワクワクする人材養成目標とカリキュラム、社会実装、定員割れ改善）
※特に、キャリア形成学科、こども教育学科の改革
- ③看護福祉リハビリテーション学部、作業療法専攻、歯科衛生学科等新設学部学科等の円滑な立ち上げ
- ④大学・高専機能強化補助金を活用した理系学科（食品生命科学科（仮称））新設の可能性の検討
- ⑤社会福祉専攻の募集停止、ライフデザイン学科の定員削減の円滑な遂行
- ⑥社会実装の一層の推進（機能性食品開発やこども食堂、その他本学の特色と連動した研究等の推進）
- ⑦多職種連携教育の具体化・実質化（2025 年度から必ず実施）
- ⑧エビデンスに基づいた教育支援体制・内容の再整備（EM・IR 部、学習ステーション、コモنزの機能強化）
- ⑨教育成果の可視化（学習履歴管理等）
- ⑩教育改革を進めるための FD の強化
- ⑪退学者の抑制（退学率の改善）
- ⑫通信教育課程導入の保留・凍結

- ⑬光耀館（新棟）の活用（特に健康栄養学科、作業療法専攻（福祉リハビリテーション学科））

【募集広報活動改革】

- ①学生募集管理（教育内容、募集広報活動、結果）の徹底
- ②入学広報センター体制の強化と募集広報支援体制の整備（職員による高校・塾訪問、ガイダンス強化）
- ③高大接続・連携の強化（教員による出張講義の強化等）
- ④協定校の開拓（目標：新規 7 校、全体 10 校以上）
- ⑤内部進学促進（中高大接続を主体的に実施、自ら育て内部進学に誘導）
- ⑥全学部学科における外国人留学生獲得に向けた取り組みの強化（目標：20 名以上）

【組織改革】

- ①大学運営会議の活性化（大学改革進捗管理、ガバナンスの徹底）
- ②学生対応組織の大幅な改編（生産性の向上）
- ③大学改革を推進する中核教職員の育成
- ④大短院専収支改善計画の着実な実施と進捗管理

(3) 中高

【教育・研究改革】

- ①心を育て、学力を高める教育を徹底（光華教育の基本）
- ②2025 年度に向けた中高コース体制の修正
- ③構造改革 1 期生のコースごとに設定している進路目標に即した進路実現
- ④教育成果の可視化（目標設定と達成度の可視化）
- ⑤英語教育（国際理解教育）のブランド化（カリキュラム、授業内容、イベント等）
- ⑥理数教育の推進（文理統合人材育成に向けた第一歩⇒理系学科やデータサイエンス系の学科への進学）
- ⑦教育改革を進めるための FD の強化
- ⑧進路実現に向けた指定校推薦入試枠の倍増（目標〇〇校）
- ⑨通信（単位制）課程の 2026 年度開設（成功させるための市場調査と課題解決が前提）に向けた準備

【募集広報活動改革】

- ①エビデンスに基づく募集戦略の策定と全教職員での共有
- ②生徒募集管理（教育内容、募集広報活動、結果）の徹底
- ③入学広報部体制の強化と全教職員による募集広報支援体制の整備（学校・塾訪問、ガイダンス強化）
- ④連携小学校、中学校、塾の開拓（出張授業、クラブイベント等）
- ⑤内部進学促進（小学校との連携並びに中高一貫体制の強化）
- ⑥奨学金に頼らない募集への移行推進とクラブ募集強化の両立
- ⑦帰国子女、留学生等の受け入れ強化

【組織改革】

- ①中高管理職会、小中高管理職会、檜の会（法人との連携）の活性化
- ②生徒数に応じた組織運営体制への移行
- ③大阪府授業料無償化への対応の検討（2024 年度は保留）
- ④中高改革を推進する中核教職員の育成
- ⑤中高収支改善計画の着実な実施と進捗管理

(4) 小学校

【教育・研究改革】

- ①心を育て、学力を高める教育を徹底（光華教育の基本）
- ②2024 年度からはじまる 6 年間を見通した教育体系の着実な遂行
- ③光華ならではの STEMS 教育やプログラミング教育の具体化、充実
- ④教育成果の可視化
- ⑤英語教育（国際理解教育）のブランド化（カリキュラム、授業内容、イベント等）
- ⑥アフタースクールの充実
- ⑧教育改革を進めるための FD の強化

【募集広報活動改革】

- ①エビデンスに基づく募集戦略の策定と全教職員での共有
- ②児童募集管理（教育内容、募集広報活動、結果）の徹底
- ③入学広報部体制の強化と全教職員による募集広報支援体制の整備（幼稚園・塾訪問、ガイダンス強化）
- ④連携幼稚園、塾の開拓（出張授業、クラブイベント等）
- ⑤内部進学促進（幼稚園との連携強化）
- ⑥児童保護者による口コミ広報への誘導

【組織改革】

- ①小中高管理職会、檜の会（法人との連携）の活性化
- ②内部進学促進（中高との連携）
- ③小学校改革を推進する中核教職員の育成
- ④小学校収支改善計画の着実な実施と進捗管理

(5) 幼稚園

【教育・研究・保育サービス改革】

- ①心を育て、豊かな人間形成の土台となる非認知能力を伸ばす光華 SEL 教育のブラッシュアップ
- ②満 3 歳児保育の充実
- ③英語教育のブランド化（授業内容、イベント等）
- ④教育改革を進めるための FD の強化
- ⑤預けやすく通いやすい幼稚園に向けた保育サービス充実
- ⑥課外活動（習い事）の充実
- ⑦2 歳児接続保育の導入（2024 年 10 月）
- ⑧1 歳児預かり保育の導入若しくは認定こども園化（2026 年度）に向けた検討

【募集広報活動改革】

- ①エビデンスに基づく募集戦略の策定と全教職員での共有・実施
- ②園児募集管理（教育内容、募集広報活動、結果）の徹底
- ③連携小規模園の開拓（施設貸出、イベント参加等）
- ④園児保護者による口コミ広報への誘導

【組織改革】

- ①幼稚園運営会議の活性化（教職員間のコミュニケーションの改善）
- ②学園運営部との連携強化
- ③内部進学促進（小学校との連携）

④幼稚園収支改善計画の着実な実施と進捗管理

(6) 収支改善

各設置校の収支改善計画の着実な実施と進捗管理

①資金流失の抑制と中期収支計画の修正

- * 不採算事業の見直しと施設等の改修の抑制
- * 学生生徒等数減少による新たな中期収支計画の策定

②人件費の適正化

- * 学生生徒数に応じた教職員数への移行
- * 役員報酬の一部カットと部門別資金収支の均衡に向けた賞与の見直し

③経費の削減

- * 学生生徒数に応じた共通経費（警備、清掃、用務員、消耗品、印刷製本、保守等）の削減
- * 奨学費の抑制
- * 広報費の見直し

④予算執行・管理の厳格化

⑤経費をねん出できる外部資金（補助金等）の獲得

⑥資産運用益 1.5%

(7) 学校法人

法人機能の強化

- ①総合学園としてのブランド「Well-Being の実現 健康・未来創造キャンパス」の構築
- ②私立学校法改正への対応（新たな理事会、評議員会への準備）
- ③理事長室による現状把握、迅速な意思決定、改善指示の強化
- ④メディアリレーションズの強化
- ⑤危機管理対策の点検と BCP の策定

5.2024 年度経営方針数値目標／

項目			方針値	備考
財務指標	(2025 年度) 学生生徒等納付金収入額		2,931 百万円	2024 年度当初予算 2,722 百万円
	(2025 年度) 補助金収入		802 百万円以上	2024 年度当初予算 769 百万円
	資産運用収入額		118 百万円	2023 年度実績 113 百万円
	運用利回り（運用収入/金融資産）		1.50%	2023 年度見込 1.87%
	(2025 年度) 資金収支差額		△249 百万円	2024 年度当初予算△494 百万円
人件費指標	ST・SS 比	大学（教員）	14.1	2024 年度見込 14.1
		大学（職員）	22.7	同上 21.9
		短大（教員）	12.4	同上 8.7
		短大（職員）	30.9	同上 21.6
		高校（教員）	10.8	同上 10.6
		中学（教員）	17.8	同上 17.7
		中高（職員）	51.0	同上 51.8
		小学校（教員）	13.6	同上 13.1
		幼稚園（教員）	12.5	同上 12.6
学生生徒数	2025 年度	入学者数※1	865 名	2024 年度見込 690 名
		在籍者数	2,620 名	2024 年度見込 2,509 名
	内部進学率	幼→小	25%	2024 年度 20.6% (13/63)
		小→中	60%	2024 年度 41.7% (10/24)
		中→高	100%	2024 年度 81.1% (30/37)
		高→大短	50%	2024 年度 36.0% (41/114)
教育指標	退学率	大学	年間：1.9%以下	2023 年度見込 2.4%
			初年度：2.5%以下	2023 年度見込 2.7%
		短大	年間：2.6%以下	2023 年度見込 1.6%
			初年度：2.2%以下	2023 年度見込 3.6%
	就職率※2	大学	95%以上	2023 年度見込 92.1%
			DP：90%以上	
		短大	90%以上	2023 年度見込 93.2%
			DP：90%以上	
	進学率	高校	国公立 6 人 (合格者数)	2023 年度 ○人
			関関同立 15 人 (合格者数)	2023 年度 22 人
			大学進学率 (短大含む) 85%	2023 年度○%
			保健医療系 医療貢献コース で 90%	2023 年度○%

	合格率	看護師	100%	2023 年度 % (/) 3/22
		保健師	100%	2023 年度 % (/) 3/22
		助産師	100%	2023 年度 % (/) 3/22
		管理栄養士	100%	2023 年度 % (/) 3/29
		社会福祉士	70%	2023 年度 84.0% (21/25)
		精神保健福祉士	100%	2023 年度 100% (4/4)
		言語聴覚士	90%	2023 年度 % (/) 3/26
		臨床心理士	85%	2023 年度 100% (3/3)
		公認心理師	100%	2023 年度 % (/) 3/29
		公立小学校教諭※3	80%	2023 年度 16.7% (2/12)
		公立幼稚園教諭・保育士※3	100%	2023 年度 100% (9/9)
		英検（小学校）※4 4 級以上	100%	2023 年度 28.6% (10/35)
		英検（中学校）※4 3 級以上	90% 以上	2023 年度 62.2% (23/37)
		英検（高校）※4 国際挑戦科 準 1 級以上	50%以上	2023 年度 0% (0/9)
		同上 アドバンスト 2 級以上	90%以上	2023 年度 39.0% (16/41) ※プリムラコース
		同上 オリジナル 準 2 級以上	60%以上	2023 年度 21.9%(14/64) ※ライラックコース

※ 1 目標人数 心理学研究科 10(12)／看護学研究科 5(5)／キャリア形成学科 60(75)／心理学科 50 (60)／言語聴覚専攻 30 (30)／作業療法専攻 30 (30) /管理栄養士専攻 80 (80)／健康スポーツ栄養専攻 30 (40)／看護学科 95 (95)／こども教育学科 55 (55)／助産学専攻科 10 (10)／人間健康学群 5 (12)／

ライフデザイン学科 60 (60)／歯科衛生学科 70 (70) /高校 125 (200)／中学校 45 (50)／小学校 55 (60)／幼稚園 50 (70) ※ () は入学定員または募集人数

※ 2 : 就職者数÷卒業者数 (進学者・留学者等除く)

※ 3 : 採用試験合格率

※ 4 : 取得率 (最終学年卒業時点)

Ⅱ. 主な事業計画の概要

1. 大学院・大学・短期大学部

(1) 光華一貫教育の創造

① 建学の精神に基づく宗教教育

本学園は「仏教精神、特に親鸞聖人があきらかにされた真宗の教えに基づく教育」を建学の精神とし、親鸞聖人の主著『教行信証』に由来する「真實心」を校訓とする。この建学の精神と校訓には、本学園で学ぶ者が、自己を省みる「智慧」と、その智慧によって導かれる他者に対する想像力「慈悲」を、その生涯において実践する者であってほしいという願いが込められている。本学は、このような人間形成を基盤とした実学教育の高等教育機関として、次の時代を切り開く若者を育成することを使命とする。その使命を果たしていくにあたり、2024年度は以下の項目に取り組む。

・学園宗教教育推進タスクフォース：今年度はタスクフォースの最終年になる。各設置校での宗教教育の取り組みを体系化し、建学の精神に示される智慧と慈悲を自らの中に育む人間形成のありようを学園の一貫教育として明示化する。

・建学の精神の具現化（「心の教育」の共有）：本学が基盤とする人間教育、すなわち智慧と慈悲を育む「心の教育」は一つの取り組み、一科目の授業によって達成されるものではない。建学の精神の具現化にあたっては、本学の教育訓「薫習」に示されるように、教職員自身が智慧と慈悲の実践者であることが求められる。教職員が仏教、真宗の考え方に触れられる機会を増やせるよう宗教部と真宗文化研究所で継続して検討を進める。また学園の取り組みを紹介する場として、報恩講法要時の東本願寺境内での学園での出展を継続し、学園各設置校の教職員、生徒学生が浄土真宗の精神を確かめ、学びを深める機縁としたい。

② 京都光華高等学校との高大接続

京都光華高等学校の3コース（医療貢献コース、未来創造コース、国際挑戦科）とのスムーズな教育接続を目的に連携を強化する。放課後の学び「ビュッフェ講座」への講座提供を引き続き行うとともに、各学科・専攻の専門教育の体験機会を創出し、将来の夢や目標に対して適切な進路選択の一助につなげるとともに、内部進学を促進する。さらに、リベラルアーツ科目を中心に実施している高大連携科目を拡充し、各コースに関連する専門教育における早期履修制度の枠組みの導入を推進する。

内部進学促進のための各種イベントについては、進路決定の早期化傾向に合わせ、低学年段階から計画的に実施し、併設大学の学びの魅力や雰囲気より身近なものとして結び付け検討する機会や、内部進学決定者を対象とした入学前教育プログラムを各学科・専攻ごとに実施し、内部進学率の向上を図る。

③ 幼・小・中・高を含む併設校への支援と連携

本年度は、光華一貫教育を進化・発展させ光華女子学園のブランド構築のために組織されたタスクフォース（英語、教育手法、宗教）の最終年度である。各タスクフォースが3年間の成果と今後の取組課題を具体的に示す。さらに、幼・小・中・高が抱える課題に対して具体的な支援と連携を図ることで大学が牽引的な役割を果たす。2026年3月には、光華女子学園一貫教育研究会を開催し、全国に光華女子学園の取組の成果を発信する。

特に、英語、教育手法、宗教の枠を超えた光華一貫教育の軸としてSEL（非認知能力育成）の重要性を認知能力と非認知能力の関係性を明確に示し、実生活に生きる汎用的な能力の育成を推進する。その際、幼・小・中・高との往還的な研究に対する支援と連携を拡充することを通して、光華女子学園のブランドを構築する。

(2) 教育・研究の質・体制の充実

① 学部・学科・研究科等の将来構想

心理学研究科

本研究科では、こころの専門家である「公認心理師」および「臨床心理士」養成を重要課題とし、現代社会のニーズにフィットした少人数による質の高い心理臨床家の養成を行う。ケース・カンファレンスとその後のフォローアップ、学内・学外での実習、スーパーヴィジョン等、院生一人ひとりに対する丁寧な個別指導を夏季・春季休暇期間も含めて継続的に実施する。さらに、修士1年生から国家試験対策を行うとともに、修士課程修了後も在籍できる研究生制度によって、「公認心理師」「臨床心理士」の両試験合格をサポートする（いずれも全国平均以上の合格率を目指す）。

修士論文等の研究指導については、全体（修士課程1・2年生合同）・グループ・個別といったさまざまな指導体制の充実、学会発表や研究紀要投稿等の研究活動の推奨により、研究の質と意欲の向上を図る。

看護学研究科

本研究科の特徴は、「看護職として臨床で培った経験知を看護学の理論および研究的検証によって探求し、社会のニーズに沿った保健・医療・福祉の向上に寄与するとともに、建学の精神に基づく思いやりの心を持って看護の発展に貢献できる人材を育成する事」である。そのための2024年度具体策は以下の通りである。

- (1) 臨床での「経験知」から得た研究課題に取り組むことで、教育・実践の場で理論とエビデンスに基づく指導力を発揮できる人材を育成する。
- (2) 働きながら学ぶ看護職者のキャリアアップを支援する。授業は週2日とし、1日は対面授業により教員や院生同士のコミュニケーションの強化、他1日はオンライン授業とし多様な授業方法の工夫を図る。働きながら学べる環境の強化策として、通学・通信コース双方の設置（2025または2026年度実施）を目指す。
- (3) 研究の地域貢献可能性の検討に取り組む。具体的には、地域の介護保険施設や病院などとの連携、同窓会組織の構築などを目指す。

キャリア形成学部

2024年度からはこれまでの3つの領域（現代社会学、生活科学、経営学）を5つのコース（現代社会・公共コース、現代ビジネスコース、クリエーションコース、グローバル教養コース、女性エンパワーメントコース）と専門基礎として再編する。これにより、今まで必ずしも十分に表現できていなかった学科の学びの広さを訴求したい。「イロドル」をキーワードに、これらの多彩なコースを自由に組み合わせて学ぶことで、現代社会の諸問題に対して、その解決方法を自ら提案し、かつ、他者と協力することで人と社会を幸福にできる人材を育成する。

さらに、全学的な健康・未来創造キャンパスのめざす姿や他学科等の改組状況等も踏まえ、2026年度からの学部学科名称変更計画に合わせて、当該学部学科の人材育成像や学びの内容を定める。



健康科学部

人々の心と体の健康づくりを根幹におき、子どもから大人まで一人のひとりの健康づくり、疾病・フレイル予防に「栄養」「運動」「心理」の側面からアプローチし、横断的な健康教育を実践する。また、新校舎の実習室を活用した地域連携を推進する。

a. 健康栄養学科

管理栄養士専攻では、管理栄養士国家試験に合格する学力を養成するとともに、より専門性に特化したメディカル栄養コース、食創造コースを開設し、現場で即戦力として活躍できる管理栄養士を育成する。健康スポーツ栄養専攻では、栄養士をベースに健康スポーツ分野と食マネジメント分野に科目を体系的に位置付け、それぞれ中高保健体育教諭・健康運動指導士の育成と、フードビジネス分野で活躍できる人材の育成を進める。

b. 心理学科

「臨床・心理カウンセリング」「子ども・発達支援」「社会・犯罪心理」の3コースにおける学びの充実を図るとともに、3つの専門職養成プログラム（「公認心理師」「児童系対人援助職」「司法・犯罪系公務員」）において進路につながる実践力の養成に努める。大学院進学及び公認心理師資格取得に向けた支援を強化する。

看護福祉リハビリテーション学部

本学部は、健康科学部の4学科を再編し、本学が掲げる「健康・未来創造キャンパス」構想において、医療・福祉分野の専門職を育成する中心的役割を果たすために、新たに設置された学部で、看護学科と福祉リハビリテーション学科（社会福祉専攻・言語聴覚専攻・作業療法専攻）で構成されている。学部の役割として、主に健康科学部と、また他の学部と協同し、地域社会のすべての年代のあらゆる面の健康を、多職種間で協働して創造できる女性の育成、さらに、得られた研究成果の社会実装、専門職育成のための教育手法の革新などを推進する。

a. 看護学科

2021年度より開始した新カリキュラムが4年目に入り、適切なカリキュラム運用を継続しつつ、国家試験受験資格、養護教諭免許取得に向けた教育の充実をさらに進める。特に国家試験対策では、新たなシステムの活用により学力の定着を促進する。また2023年度より開始した学科独自の国際交流の充実化を図るとともに、教育力の向上を目的に開始した学科FDも継続的に進める。さらに多様な困難を持つ学生の増加に対応するため、学科会議等で情報を共有し学科全体で対策を進める。

b. 福祉リハビリテーション学科

新たに作業療法専攻を開設し、リハビリテーションと福祉の連携を中核とした専門職連携の学びの充実に向け、新学科として授業内容の充実や学内外プログラムの創出に取り組む。言語聴覚専攻では、「光華もの忘れ・フレイルクリニック」と協働して初年次より現場体験の充実を図り、授業内容や臨床実習の理解を深め国家試験合格率向上を目指す。社会福祉専攻では、学生の地域活動への参加や教員の専門性を活かした関係団体の連携を深め、国家試験合格率の向上を目指す。作業療法専攻では、作業療法士をめざす学生に対して、建学の精神に基づき「慈悲の心」の理解ができるようにすすめる。これからの4年間を通して確かな専門性を備えるために国家試験最重要科目である基礎医学3科目（解剖学・運動学・生理学）を授業と補習で学生の基礎医学知識高水準習得を目指す。

人間健康学群

栄養、心理、福祉など学部横断的な健康関連の専門基礎知識の修得に向け、学生が履修しやすい時間割作成と履修指導を行う。専門基礎知識の課題発見・解決への活用に向け、健康関連企業、医療事務、社会福祉法人など多様な健康関連の企業・施設等と連携し、インターンシップ研修参加を学生に推奨・指導する。専門知識・スキルの定着に向けて、健康関連、事務系、金融系など、学生の関心・進路に合う資格取得を推奨し、履修指導や授業外での学習支援を行う。夏休みに2年次学生がバリ島研修に参加する。国際交流センターと連携し、事前・事後学習を学生指導する。学部等連携の強みを活かして、本学の健康創造キャンパスを目指して、教

職員と学生の健康習慣形成を促すための取組を立案して推進する。学部等連係課程による幅広い健康関連科目を学び、健康長寿社会に貢献できる学生を育成する。

こども教育学部

本学部では、「全ての子どもの可能性を引き出し、伸ばすことのできる保育者・教育者」を養成する。具体的な人物像を知育・徳育・体育の3観点から明確に示し、系統的なカリキュラムを通して育成する。

知：保幼小の系統的な教育の重要性を理解し、子どもの発達段階に応じた継続的・体系的な教育が出来る「確かな学力・授業力」を身に付けている。

徳：「思いやりの心」「寄り添いの心」「助け合う心」を持ちながら子どもに接し、指導に活かすことができる力を身に付けている。

体：「健康と未来創造の関係」を明確に理解し、身体的・精神的・社会的にWell-Beingを実現する健康未来創造力を身に付けている。

研究の質・体制の充実においては、引き続き光華一貫教育の推進と充実の為に学園において牽引的な役割を果たす。研究が学園のブランド形成につながるよう、各校園の連携体制の強化を図る。

短期大学部

教育改革の推進について、新設された歯科衛生学科においては、設置計画に基づく教育体制および教育環境の安定的な提供を目指す。また他職種連携教育に向けた京都光華女子大学の各学科との連携を図り、光華EDUALプログラムを推進する。さらにKOKAワクワク健やかフェスでのブース開設を通して地域での認知度向上及び地域連携に貢献する。

ライフデザイン学科では、（１）コンピテンシー育成を重視したディプロマ・ポリシーの変更とそれに基づくカリキュラム改革、（２）学生の主体的学びの活性化のため、①産官学／地域連携授業の導入などのアクティブ・ラーニングの導入、②短大フォーラムをはじめとする短大間連携の取組の強化、③学生と教職員の共同による正課外活動の充実を行い、（３）以上の教育改革による学修成果の可視化に取組む。

募集広報活動では、近畿、福井、鳥取を募集強化エリアと位置づけ、入学・広報センターと短大教員が連携して高校訪問等の広報活動を行う。また、短期大学部独自のオープンキャンパスを開催するとともに総合型選抜の事前相談を早期に開始し、「面談」「体験授業」を実施して9月以降の出願増につなげる。京都光華高等学校に対しては、ビュッフェ講座や医療人ゼミを通して短期大学部での学びの理解を進め、内部進学率の増加を目指す。また、出張講義を拡大し、志願者増につなげる。

助産学専攻科

専攻科での助産師教育は7年目を迎える。ここ数年、入試倍率は2.5～3倍程度となっているが、近畿圏での助産師養成課程も増加しており、受験生に選ばれる専攻科となるように、HPでの情報発信、OCの内容充実に努めたい。看護学部からの内部推薦入学者の一定数確保のためには、学部生へのガイダンスや学内説明会も充実を図る。

助産師教育における臨地実習環境は、少子化傾向やハイリスク分娩の増加などの要因により、決して良いとは言えない。学生全員が十分な教育効果を得られるように、引き続き実習施設の確保、拡充に努めていく。また、学内でのシミュレーション教育、OSCEの導入を進め、判断力・実践力を高めていく。救命・救急に対応できる診断能力、実践力育成のための演習科目の充実を図り、認定資格取得を目指す。

助産師国家試験の合格率100%を維持するために、個別対策指導の充実、e-Learningの有効活用を図る。

リベラルアーツセンター

リベラルアーツ教育の目標を「思いやりの心と創造力を兼ね備えた人材の育成」に置く。「仏教の人間観」と「京都光華の学び」を教育活動の基盤とし、リベラルアーツの本義である自然科学、人文学及び健康未来創造の土台となるスポーツを重点分野として、各学科目で教育活動を推進する。2023年度に整備された光華EDUALプログラ

ム（文科省認定、数理・データサイエンス・AI教育プログラム及び、2022年度に採択された三菱みらい育成財団による「21世紀型教養教育助成金」に係る12プログラムの着実な運用と、成果の検証を行い、2025年度以降の教育内容の充実と教育方法の開発を遂行する。教育効果の検証は、論理的な読解力と思考力を測るリーディングスキルテスト(RST)、実践的な英語力、数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル、応用基礎レベル）を通じて行い、教育力向上に活用する。

② 基幹研究の展開（研究力の向上、人材育成支援事業の獲得）

「健康・未来創造キャンパス」の実現と、本学のブランド構築につながる研究力の向上・社会実装を目指して産官学連携や学内外の共同研究を推進する。基幹研究においては、「健康・未来創造キャンパス」の実現に関わるプロジェクトを「よりそい」を科学するというキーコンセプトのもとに展開し、研究成果の社会実装、大阪・関西万博パビリオンへの参加を目指す。

・産官学連携によるデジタルを活用した教育機器やプログラムの開発、食のバリアフリー化、女子アスリートの食事と健康の関わり等を通して子どもから高齢者までさまざまな人が抱える課題解決に向けた研究活動を推進する。

・光華もの忘れ・フレイルクリニックと連携し、看護福祉リハビリテーション学部・健康科学部における教育研究、地域連携・多職種連携の活性化を図る。

③ 学修・学生支援体制の向上

学修支援では、①多様な学生の学修機会を増やし学習効果を高めるために、開講科目の授業形態や開講のあり方を検討する。②各学科・センターとの連携を強化し学生への履修指導をより丁寧に行い、標準修業年限内に卒業できる学生の増加および退学防止に努める。③学習ステーションの利用者増に向けた方策を計画し実行する。以上により、学生サポート体制の更なる充実を目指す。

教職・保育職支援においては、教員及び公立保育職採用試験対策と合格者の増加、関係学科と組織的に対策出来る体制のもと、ボランティア活動やインターンシップ、キャリアイベントなどを通して、多様な経験の蓄積や主体性の喚起と課題意識の啓発を促し、教職や保育職志望者への確実な進路保障を目指す。

2024年度より障害のある学生への合理的配慮が義務化されるが、支援内容の多様化の中で学生・教職員への合理的配慮に関する正しい理解、教職員間の連携や共有のあり方、また、学生への合理的配慮に関する情報提供方法、支援手続きなどについて整理したガイドライン作成、支援体制などの検討、構築を行う。入学前交流会の評価を行い、さらなる充実を図り退学率減少を目指す。

④ 光華独自の教育・指導法（光華メソッド）の確立

教育・指導法の開発としては、学生一人ひとりの学修段階・習熟度に応じた個別学習教材による教育手法の開発と導入、効果的なLMS、指導ツールの利用拡大を図る。また、FD活動を通して教職員が誰でも同じ説明が出来るように光華メソッドの特色を再定義することを試みる。すなわち、その特色を①仏教教育に基づく教育、②教職員からの薫習による教育、③「知・情・意」による3側面からの教育とする。「知」とは専門およびリベラルアーツ教育、アクティブ・ラーニングを通じた専門知と社会を見る目の育成を意味し、「情」とはピアサポーター・クラスアドバイザー制度や種々の学生支援体制による感情の安定を意味し、「意」とは学習ステーション、コモンズ、図書館などの学びの場を通じたGRIT（やり抜く力）とMindsetの転換（自己肯定力）の育成を意味し、仏教精神を根底にした教職員の日々の活動から学生は薫習を受けながら、知・情・意を養う。

⑤ 他大学との連携（共同授業・研究等）の強化

他大学との連携により、それぞれの教育研究資源を結集し、共同でより魅力ある教育研究・人材育成を実現することを目的に、多様な教育プログラムを提供できるよう検討する。教育課程上の連携としては、大阪大谷大学薬学部と本学看護福祉リハビリテーション学部・健康科学部ならびに短期大学部歯科衛生学科との間で「専門職の連携（基礎）」の授業を共同開講し、多職種連携教育を推進する。国が進める大学等連携推進法人の枠組みを活用した新たな授業科目の開設、教学管理体制の構築、共同研究等についても継続検討する。大学コンソ

ーシアム京都と連携した単位互換の実施のほか、産官学連携科目として2025大阪・関西万博を契機に京都の文化・環境、産業、観光、地域等について俯瞰的に知見を得、他大学・団体との交流を通して様々な提案を行う授業を展開する。

⑥ 就職・キャリア開発・地域連携への支援強化

就職支援センターでは、「就職率100%」・「就職満足度95%以上」・「第1希望での就職割合80%以上」を目標としている。学科のDPや養成人材像にも留意して、学生が興味を示し・魅力に感じる分野を見出し、社会人への第一歩となる就職活動を通じて、学生が成長し、自信をもって社会に出ていけるよう支援を充実させる。一人でも多くの学生が第一希望に内定できるよう、年4回の就職ガイダンスをはじめ、OG懇談会・合同企業説明会や各種セミナーを開催し、就職支援システムである「コーキャリア（KOKA Career）」を活用して、多様なニーズに応えていく。

地域連携推進センターでは、「健康・未来創造キャンパス」の実現を目指し、京都市をはじめとする自治体・周辺地域・地元企業との連携を深め、持続可能な地域との共生・共創を推進する拠点となることを目指す。2024年度より新設する新学科（作業療法専攻・歯科衛生学科）を加え、新たに稼働する新棟「光耀館」において、「KOKAワクワク健やかフェス」や「こども食堂」を軸に様々なイベントを行う。また、「TEAM EXPO 2025」共創パートナーや共創チャレンジの取組において、本学教員の研究成果として、嚥下調整食和菓子（やわらか和菓子）、機能性洋菓子（希少糖羊羹、漢方を利用したカヌレ等）のパビリオン出展を計画する。さらに、「光華もの忘れ・フレイルクリニック」による認知症予防、「まちやキャンパス」の活用を含めた地域交流の場を提供することで社会実装をすすめていく。

⑦ 研究支援体制の充実

研究基盤充実のため、科研費や私立大学改革総合支援事業、国の研究開発プロジェクトなどの競争的外部資金の採択率の拡大を目指す。具体的には、特別研究経費による基盤研究支援、外部資金獲得に向けたインセンティブ制度や学内説明会、研究アドバイザーによる勉強会を積極的に実施する。また、研究倫理審査申請をサポートするため、申請手続きやルールを明確化し、適正で迅速な審査を実施する。さらに、研究成果の発信力向上のため、学術論文、研究レポート、レビューなどの作成と投稿を支援し、学術刊行物出版の助成にも力を入れる。加えて、社会実装を見据え、フレイルクリニックなどの学内機関の活用、機能性菓子開発などの産学連携事業の推進をはかり、大阪・関西万博には共創パートナーとして参加し、研究成果の効果的な発信により本学のブランド力を高める。また、教員が研究に専念できる期間を確保するための制度導入に向けて検討を行う。

⑧ キャンパスのグローバル化の推進

国際交流センターでは、国際交流委員会と協働し、学生の海外への興味・関心をさらに醸成するよう、さまざまな機会を提供していく。海外からの研修生の受け入れ機会等を活用し、外国人学生との交流を通して、多文化への理解を深めることで、本学が実施する海外短期研修（語学、文化体験等）、学科での学びに合わせた海外専門短期研修への参加を拡大していく。また、長期・セメスター留学、短期大学部留学制度における協定校のさらなる拡大を図る。

外国人留学生の受け入れにおいては、日本語学校との継続的なネットワーク構築や、多様な受入方法を検討・実施していく。加えて、入学後の日本語サポートや授業支援、大学生活のサポートを行う在学生によるピアサポートも始動する。

これらの施策に取り組むことで、外国人留学生・研修生がキャンパスに滞在することによる「環境型のグローバル化」と、日本人学生の海外滞在経験や外国人との交流によって語学力を向上し、多文化に対する幅広い知見を

深めていく「経験型グローバル化」の実現を目指す。

⑨図書館・真宗文化研究所・カウンセリングセンター・人権啓発センター・光華もの忘れ・フレイルクリニックの事業計画 図書館

本学の建学の精神である仏教の思いやりの心に基づき、健康・未来創造キャンパスの実現に向けた学術情報基盤としての役割を果たす。

2024年度設置の新学科・専攻に対応した図書・雑誌、データベース、電子図書の整備を引き続き行い、学生のニーズを把握した時代に合った空間づくりを行う。資料を十分活用できるように教員と連携した利用教育を積極的に行い、学力向上や学習習慣の定着化を図る。ラーニングコミュニティ「学Booo」を提供して、能動的な教育活動の一端を担う。SDGs、多様性、合理的配慮の理解など社会への視野を広げる企画を実施して、女子教育を促進し、「思いやりのある」図書館を目指す。

また、オープンライブラリー、中学生職場体験、社会人利用、古本市などの取り組みを通して、Well-Beingな取り組みを推進し、生涯学習を支援する拠点として地域への貢献に努める。

真宗文化研究所

真宗文化研究所は、学園創設の建学の精神と校訓「眞實心」に基づき、真に生命力をもつ真宗文化の本質、本学園の宗教教育の在り方、現代社会の諸問題への対応等を考究し、学内外へ啓発、訴求することを目的としている。

この目的を達成するために、（１）建学の精神の具現化に向けた仏教教育の在り方について、学園内各設置校と連携し探求を進める。また現代社会の諸問題への対応について、臨床系学科・専攻との共同研究に向けて準備をはじめめる。（２）「宗教講座—豊かな人間性を目指して—」や「聖蹟巡拝」を実施し、学生や教職員が仏教・真宗への理解を深める機会とする。（３）委嘱研究員制度に基づき研究員を学内外から公募により委嘱し、その研究成果を公開する。また、特別研究員、並びに客員研究員制度などの研究員制度を生かし、研究機関としての機能を高める。（４）本研究所の研究活動と本学の宗教教育の実践を学内外へ公開するため、刊行物として、研究年報『真宗文化』、および「宗教講座」の講話録である『眞實心』を発行する。これらの刊行物を広く社会に公開するため本学リポジトリと本研究所ホームページに掲載する。

カウンセリングセンター

カウンセリングセンターは地域に開かれた「こころの相談室」として、「子どもと女性の心に寄り添う」ことをモットーに、心理的援助を必要とされる方の気持ちに寄り添ったカウンセリング（個別の心理相談）を行う。また、本センターは大学院（心理学研究科臨床心理学専攻）附属の実習施設として、「公認心理師」および「臨床心理士」養成課程における重要な役割を担う。

カウンセリング等の相談業務に加えて、本センターが実施している親子教室では、就学前の子どもと保護者のふれあい遊びを行う「ひかりっこ＊くらぶ」と、子育て相談の「こもれびスペース」により、子育て支援への社会的ニーズに応える。その他、「京都光華女子大学カウンセリングセンター研究紀要」を2024年度も引き続き編集・発行する。

人権啓発センター

学生、教職員の一人ひとりが心理的、身体的に安全かつ快適な環境で勉学や研究に専念し、全ての人の人権が尊重され、お互いが相手の立場を重んじることができる良好なキャンパス環境を維持するため人権に関する啓発活動に取り組む。主に学生を対象とした「人権映画鑑賞会」「人権講演会」では、身近に起こりうる人権問題、あるいは、社会的な人権問題への認識等に着眼したテーマ選定を行っていく。教員対象の「人権研修会」については、教育活動に有益なテーマを宗教・人権・真宗文化委員会と協議のうえで設定し実施する。これらの啓発活動においては、教員・職員へも参加促進を行い、FD・SPにも活用できるようにする。

また、セクシュアル・ハラスメント、アカデミック・ハラスメント、パワー・ハラスメント等全てのハラスメント防止となるよう、引き続き、啓発冊子「ハラスメントのないキャンパス・ライフ」の配付を行う。

光華もの忘れ・フレイルクリニック

2024年度は、2023年度に行ってきたことを継続発展させていく。クリニックの集患はまだ不十分なため、京都大学医学部付属病院、桂病院、武田病院などの総合病院との連携を図り、紹介患者の増加を目指す。認知症初期集中支援チーム、あるいは近隣の地域包括支援センターとの協業を増やすことで、支援者に対する本クリニックの機能や役割についての認知を高め、支援者からも紹介を受けられる体制を整えていく。地域住民への貢献については、これまで行ってきた講演会や非薬物療法の体験会などを通じて、認知症についての正しい理解、対応ができるよう情報提供するとともに、高齢者や支援者が参加できるプログラムについて、他学科、他専攻にも協力をお願いし、充実させていく。「光華ワクワク×健やかフェス2024」においても、新棟1階のフィットネスルームを活用して高齢者向け/フレイル予防の体操教室を実施し、積極的な情報発信を行う。学生教育への利用については、実習などでワクチン接種を要する学生にワクチン接種の場を提供する試みを始め、実習としてはすでに行っている言語聴覚専攻の学生に対する実習の場の提供に加え、1回生の段階で授業の中で実際の医療現場に触れ、学生のモチベーションを高める場として利用できるよう、授業プログラムを見直している。また、4月実施の学生向け健康診断の未受診者対応を4月・5月に行い、学生の利便性を高める。

(3) 経営基盤の強化

① 志願者増につながる戦略的募集・広報活動

2025年度学生募集戦略において、「営業活動重視」「広報内容の魅力化の追求」「高大接続・連携の強化」「早期獲得のための入試制度」の4点を活動方針と定め、入学志願者の底上げ、ひいては、全学科・専攻での入学定員充足を目指す。広報活動においては、健康・未来創造キャンパス構想のもと、「Well-Beingの実現を目指す大学」というブランドイメージの構築、周知、浸透させるためのキャッチコピー『For Future Well-Being』（校訓「真実心」のもと、「すべての人が健やかに暮らせる＝“Well-Being”」な未来の実現を目指し、地域に開かれ、人々に寄り添う人材育成拠点として社会の要請に応える大学）を継続して掲げ、本学の目指す方向性について、Webを中心とした媒体を効果的に活用し、知名度・認知度の向上に努める。さらに各学科・専攻における競合校分析に基づき抽出された本学ならではの魅力を、学生による社会実装活動などを通して具体性を持って発信することで、京阪神地区における唯一無二のポジションを確立する。

募集活動においては対面営業活動を最重要施策とし、現場ニーズに即した丁寧な高校訪問を早期から仕掛け、特に探究活動等での高大連携を積極的に提案し、新規連携校を一校でも増やす。また、ガイダンスで直接接触した高校生を一人でも多くオープンキャンパス来校へつなげ、新棟を全面的に活用した体験型イベントや、在学生との交流をメインに高校生にキャンパスライフへの期待感・ワクワク感を醸成するためのプログラムで着実に志願へとつなげる。そして、早期から受験生によりそう入試制度を設計し、年内入試の志願者獲得に注力する。さらに、外国人留学生の獲得においても入試制度の整備や日本語学校訪問や連携など募集施策を強化し前年以上の入学生の獲得を目指す。

② ガバナンスコードの策定と運用

私立大学として主体性を重んじ公共性を高める自律的なガバナンスを確保し、より強固な経営基盤に支えられ、私立大学の教育・研究・社会貢献の機能の最大化を図り、社会的責任を全うするため、ガバナンスコードを策定してホームページに公開している。大学運営においては、これを指針として取り組んでおり、適合状況、実施状況については、学園監事による監査および中長期計画の進捗度の点検や大学の自己点検・評価の中で点検されている。監査報告書および大学基準協会による認証評価の結果については、それぞれ運用が適切であること、大学基準協会の基準に適合しているとの評価を得ており、今後も適切な運用と点検評価・改善に努める。

③ SD実施強化の検討

「学校法人光華女子学園SD規定」に則り、教職員のモチベーション向上やコンプライアンスを徹底することを目的に、教職員を対象に階層別・分野別にSD研修を実施している。学内においては、新規採用事務研修をはじめ、全職員対象の夏季職員全体研修、管理職を対象とした管理職研修のほか、教職員を対象とした防災研修、人権研修会、研究倫理教育、情報セキュリティ教育を実施して研究倫理の徹底、公金意識の徹底、ハラスメントの防止、個人情報の保護と情報セキュリティの向上に努めている。また、学外研修として、本山研修（東本願寺）、大学SDフォーラム研修（日本能率協会）、京都大学私学経営アカデミー（京都大学）へ参加している。今後は、SDの捉え方を拡大し、教職協働で大学を運営するために必要な資質向上を図るための方策も検討していく。

④ 大学・短大における基金の設立

個人、企業、財団等からの寄付金の受け入れ体制を整える。すなわち、研究資金の受け皿となる光華研究ファンド(仮称)の創設、使途に応じた寄付の仕組みを検討し、卒業生や学園関係者のネットワークを活用した寄付金制度を整備する。同時に、大学の教育・研究活動をタイムリーに情報発信すること、セミナー、健康フェスティバルなどのイベントやリカレント教育などの共同事業を進めることによって、同窓会、地域企業や各種団体との連携を強化し、教育・研究支援における寄付の重要性について理解を求める。なお、各教員の研究内容を魅力的で分かりやすい情報として発信するため、大学ホームページを活用する。また、同窓会の総会や支部会、大学イベントへの教職員の参加を促し、在学生と同窓生や企業人との懇談会、調査研究やビジネスにおける教員と企業との連携、まちやキャンパスの活用などの共同事業を推進する。

2. 高等学校・中学校

1. スローガンと校是と人材育成

(1) スローガン：「ワクワク感を追いかけよう」

生徒が学校生活にワクワク感を感じられる場面は以下の通りだと考える。まずは分かりやすさと身についていると感じられることからくる授業の楽しさと、進路目標に向けて着実に進行していると感じられること。次に学級や学年に確固とした「居場所」と「出番」があり、安心してその場に居られるとともに、自分が周りの人の役に立っていると思える「自己有用感」があること。更に先輩後輩や友達と仲良く、時には切磋琢磨しつつも部活動や学校行事に熱中していること。これらは、学校生活を送るうえで生徒に保証されるべき当前の権利でもある。このことを教職員が改めて認識し、目の前の生徒に接しなければならない。生徒がワクワク感を感じながら生き生きと楽しそうに学校生活を送る姿を見守ることこそが、教職員のワクワク感につながる。

(2) 校是：「Students & Parents Satisfaction の向上」

生徒の満足度が高いという状態は、(1)で示した生徒の「ワクワク感が」高いということである。そして、生徒が満足して学校生活を送っている姿を見ることが保護者の満足度を高めることになる。また、目の前の生徒や保護者の満足度を高めることは、学校のよい評判となって今後の生徒募集につながってもいい。教職員全員がそのことを再認識して日々の業務にあたる。

(3) 人材育成：「思いやりの心と創造力を兼ね備えた人材の育成」

思いやりの心は本学園が最も大切にしている「慈悲の心」のことである。本校には様々な課題を背負わされた生徒が在籍する。また、彼女らは夫々の目的や目標に向かって頑張っている。生徒に静かに寄り添い、叱咤したり激励したりしながらその力を引き出したり伸ばしたりすることが教職員には望まれる。親鸞聖人は「自分には“真実心”は備わっていない。だからこそそれを求め続ける」と仰った。私たち教職員は、生徒に寄り添いその成長を共に願いながら自らも成長していく必要がある。教職員は生徒によって育てられる。教職員は、生徒を慈しみその成長を願って誠心誠意取り組む過程でこそ力をつけていけるのである。このことを全教職員で共有する。

2. 光華一貫教育の創造

(1) 建学の精神に基づく宗教教育

本校では、建学の精神のもと、校訓である「真実心」を具現化すべく“心の教育”を教育目標の筆頭に掲げ、教職員及び生徒が実感できる具体的な教育活動を行っている。2022年度から「新生光華」をスタートさせるべく、教育内容の抜本的見直しを行ってきたが、仏教教育を基盤に据えての「光華の心」＝「心の教育」の育成に力を入れることは変えてはこなかった。2021年度から実施している毎週水曜のzoomによる朝の礼拝は、宗教教育による心の育成に大きな影響力を与えている。来年度以降も、生徒や教員による感話の内容をより一層充実させ、生徒が豊かな心をもって学校生活を送ることができるようにする。

校内では年間に様々な宗教行事が営まれるが、そのどれもが大変厳かで、生徒は単に仏教の教を学ぶのではなく、自らの生き方を自然と見つめ直すことができる時間となっている。三帰依文の唱和や恩徳讃の合唱なども、それを繰り返す行うことでその内容ややっていることの意味について分かってくるように見える。これらの取組を更に充実発展させ、この際に生徒に爽やかな感動を感じさせることでその心を一層育てていきたい。

(2) 体験・探究学習×教科学習×Edtech

本校では、2020年度入学生から個人デバイス（surfacego）を必須化し、全教育活動において利用を促進している。2024年度においては、全生徒が個人のデバイスを持って2年目となる。現在、生徒は授業場面でデバイスを自在に操り、学習を効率化しその効果を高めている。また、主体的学習・双方向授業ツールとして、「Meta Moji」を活用して、授業等でのICTを使った双方向型授業を実践している。

全世界的なICT教育の普及と相まって、本校の授業場面での自然なICT機器活用の様子も急速に進み、生徒の操作能力の習得の速さとその活用力は予想をはるかに上回っていると言える。また、2022年度からの構造改革の目玉の一つである「体験型、探究型、協働型学習」は3年を経て各授業の中に定着し、生徒の思考力・判断力・表現力を高めつつある。探究活動において実施してきた「京都+アドベンチャー」では、今年度の2年生3チームが2024年2月24日（土）に研究成果をもって全国大会に出場し、その中の1チームは翌日の決勝戦まで進出するなどその成果を出しつつある。

教科学習については、2023年度は「対話」に力を入れた協働型の授業を組み立てることを研究テーマとして取り組んできた。研究発表会では、様々な教科の公開授業で活発で内容の深い討議が行われ、来校者から高い評価を得ることができた。また、習熟度別・補完学習を目的にデジタル教材「Crassi」を導入・運用してきたが、更に、「Atama+」を導入して自主学習を促進し、生徒一人ひとりに基礎学力の目標数値を与え、学力向上を図るとともにPDCAサイクルによる管理の徹底を行っていく。

更に、StudyHallやEnglishcommonsでの取組や放課後のビュッフェ講座の内容を見直し修正を行いながらも、京都光華女子大学との連携はより密にし、魅力的で実践的な取組を増やすとともに大学での学びを先取りして生徒の満足度向上を図るとともに、各コースの充実につなげていく。

(3) 言語活動と異文化理解教育

2023年度は「対話」を重視した授業の創造をテーマに掲げて授業研究を行ってきた。授業の中で生徒同士の「対話」の場面が増えたばかりか、Zoomを使って遠隔地の生徒とのやり取りも盛んに行われるようになった。とりわけ、高校2年の研修旅行と中学3年の修学旅行で、夫々台湾やシンガポールの学校と交流が計画されたことで、事前学習として行ったZoomによる交流会は画期的であった。英語で相手校の生徒と、何とか意思疎通をしようと奮闘する姿にこの教育活動の大きな意義を感じた。

全校集会の場面で生徒に意見や感想、決意を述べさせる取組も定着した。1学期の始業式では、生徒の発言する姿に驚いた生徒たちであったが、今では数人から十人程度の生徒が自ら登壇して思いを述べるようになった。また、研究授業の際に行った宗教の授業のことも書き記しておきたい。これまでの講義形式の授業に工夫を加え、宗教科の教師と担任教師と一緒に授業を計画立案して、グループワークを中心とした生徒主体の授業が出来上

がった。これらは、まだ始まったばかりであるが、来年度以降も今年の成果を大切にしつつ発展させていく。

国際挑戦科を中心に、海外の出来事や地球規模の問題に目を向けた取組を実践してきた。生徒たちは、特に女性の地位の問題や環境問題には関心が高く、主体的積極的に学習に向けて取り組むことができた。今後は、これらの実践や取組を国際挑戦科以外にも広げるとともに、京都光華の強みとして学校外にも上手く広報していく必要があると感じている。

3. 教育研究体制・質の向上

(1) 教育体制・運営体制、研究体制、中学校・高等学校のコース改革のあり方

2022年度から実施してきた学校改革は、従来型学校運営からの脱却を目指し、パラダイムシフトで学校改革（小中高構造改革）を推進することであった。構造改革の中心は、具体的な教育の中身、コース、募集広報、人事・組織を抜本的に見直し、2023年度へ好スタートを切るべく新コースの中身のブラッシュアップに努めてきた。

管理職会・各教科会においては、具体的な教科毎の目標数値等を設定し、協働して目標実現に取り組むとともに組織を円滑に運営するため、PDCAサイクルによる管理を徹底する。さらに、全教職員参加型運営の観点から教職員の前向きな意見を一層吸い上げて実現していく。

(2) 働き方改革に向けて

働き方改革の推進については、重要案件としてこれを断行していく。職員室の完全閉室時間については、19時30分を徹底する。また、今年度は変型労働時間制が定着し、無駄な勤務についてはほぼなくすることができた。今後は、授業時数の確保、学力の保障などの観点を見失うことなく「時差勤務」の導入を検討していきたい。

また、本校教育の重要な柱に部活動があるが、その指導に要する時間については、外注化をスタートさせたことで学校業務と切り離して考えることができています。

引き続き、労働環境の改善に努めが、単なる労働時間の短縮ではなく、時間を有効に使い、業務に充実感が感じられるような業務分担と組織体制の検討を更に推進する。

(3) 教育研究の充実

ハード面、ソフト面での環境整備

教育環境の充実に向けて、学校業務のICT化を推進すべく、2020年度入学生から教育プラットフォーム「Classi」を導入しているが、来年度においても、活用範囲をさらに拡大させて円滑な運営・実施を行っていく。また、探究学習の推進については、現実社会と連動しながら「生きる力」を育む教育プログラム「クエストエデュケーション」を引き続き活用し、探究学習の推進とともに教員の授業サポートを実現する。また、校内全館Wi-Fi化に伴ない生徒への個人デバイスの活用幅を広げるとともに光風プラットフォーム行ったことで、図書館教育の充実と探究教育の充実や理科室の専門別教室を活用し、より高度な専門的な教育活動を行う。

今年度は11月17日に幼・小・中・高合同の研究発表会を行った。「対話」を利用して表現力を養うことをそのテーマとしたが、これまで研究してきた本学園のタスクフォースである「英語教育」「宗教教育」「教育手法」がその根幹となった。研究が「研究発表会ありき」で進行的なため、それが全体のものになっていかないという課題が残ってしまった。来年度は、「何をどう研究していくのか！？」というところから見直し教職員の研究環境を整えていく。

新棟が完成し、小中高の真ん中に位置する光風館の一室に小中高のHealingplaceを設置することができた。このことで、教室に入りにくい生徒や誰かに話を聞いてもらえれば落ち着ける生徒など、日々の学校生活で「困り」を抱えた生徒が“ほっ”と一息できる場所を確保することができた。現在も様々な生徒が様々な方法で活用している。来年度は、支援員やSCの有効な活用の仕方の中にHealingplaceの使い方も加えて考えていく。

(4) 経営・運営基盤の強化

志願者増・入学者確保につながる戦略的募集・広報活動

年間を通して来年度の生徒募集に向けて対策を練り行動を起こしてきた。募集活動を入試広報部任せにするのではなく、教職員全員で学習塾廻りをするなど新たな取組も開始した。「募集戦略の見直しとその確認」という側

面と「募集・広報活動の見直しとその確認」という2つの側面から次年度に向けての取組を具体的に計画し実践していく。

①「募集戦略の見直しとその確認」

募集の基本は、生徒が『来たい』と思える学校にすることである。生徒にとって魅力ある学校にするために、具体的に次のことに取り組んでいく。

○心を育て、学力を高める教育（光華教育の基本）の徹底

○2025年度に向けた中高コース体制の修正 ○構造改革1期生の現状把握と進路実現

○目標設定と達成度を常に把握することによる教育成果の可視化 ○英語教育の更なる充実と発展

○理数科教育（リケジョの育成）の推進 ○教職員の教育力を高めるための研究や研修の強化

○指定校推薦枠を増やすことと、総合型選抜に対応した生徒の論文力やプレゼンテーション能力の向上

○通信（単位）制課程開設に向けた準備

特に今年度は右図の通り。

中高コース体制の修正に時間をかけて取り組んできた。その内容を教職員で共有し、計画通りに生徒を育てることを目指し、一致団結して取り組む。教育内容を充実させることで、生徒が楽しく学校生活を送り、その結果として目指す進路を実現させることができる学校にしなければならない。その際、その大きな目標に向けて定期的に



達成度を把握しながら取り組む。このような教育成果の可視化を図る場面を「管理職会」とし、入試広報部が資料を提案する。また必要に応じてその内容を全教職員で共有する。

英語教育の充実については、中学校高校をとおして、学科ごとに取得させたい“級”を設定しそれに向けて取り組ませることでその成果を確認できるようにする。また、今年度から京都大学エネルギー理工学研究所と協力して理数系教育に力を入れる。女性が弱いとされる理数系の社会的分野に進出する女性を中学校から育てることで、この教育を京都光華のブランドにしていく。

②「募集・広報活動の見直しとその確認」

○学習塾への訪問

学校長をはじめとした管理職（副校長・教頭・事務部長）による「重点塾」訪問を年4回は実施する。

春-新年度の挨拶 夏-イベントの案内と教育内容の説明 秋-受験の依頼 冬-受験生の確認

また、入試広報部による定期訪問は、分担を決めて最低学期に2回、年6回は実施する。さらに、全教員による定期訪問を1人3～5塾を学期に2回程度実施する。この際、先に述べた通り資料を携え目的をもって訪問する。

○校外イベント（ex:私学フェア、私立中高展）→校内イベントへ導く

生徒や保護者のブースへの立ち寄りが少ない、言い換えれば、呼び込みが足りないという点を反省し、来年度は新制服を活用した呼び込みを企画実行する。具体的には、試着会やファッションショーを実施して生徒や保護者の関心を引く。

○校内イベント（ex:OS、NOS、部活体験会、入試説明会）→“光華 Fun”にして逃がさない

今年度本校を受験してくれた生徒の中に、予想以上にここでの学校長の話に影響を受けているということが分かった。そこで、来年度は経営方針の説明やVTR等を活用した広報活動により一層力を入れたい。また、その

後の教育内容の説明については、パンフレットを見ればわかるような内容には時間をかけず、学校生活の楽しさや卒業後の生徒の活躍の様子に焦点を当てた説明をするように切り替える。また、本校の特徴である伝統文化の授業や「おおきに祭」「Nove」などの楽しい学校生活を強くPRする。

また、フラワーズや部活動中の生徒を使った明るく温かい対応をすることで、生の生徒の様子を知ってもらう。更に、これまで通り、授業体験や実験、部活動体験に加えて、お菓子作りや工作などの楽しい活動を通じて、本校の楽しい学校生活に気づいてもらう。

○中学校入試に重点を置いた募集

元気のよい中学生を確保することで校内をより活性化する。中学入試は学習塾頼みの部分が多いため、「より質の高い学習塾訪問」を行って本校教育の目的と目指す生徒像を伝え、生徒に本校を紹介してもらえようにする。その際に、私立中学校ならではの特徴を明確化することが「より質の高い学習塾訪問」ということにつながる。その特徴とは、特進（「特進アドバンス・コース」）の設置による国公立大学を目指す層の生徒と、公立校では難しかった部活動で自己実現を目指す層の生徒を確保し、それぞれが互いをレスpektしながら自己の目標に向かって頑張る学校だということである。

③「その他」

○教職員の育成

本校の教職員組織体制は以下のとおりである。

50歳代教員—9人、40歳代教員—5人、30歳代以下教員—20人

また、50歳代後半の教員が5人を占め、5年後には大きく体制が変わることになる。50歳代教員の本校組織内に占める役割は非常に大きく、次の40歳代、30歳代の教員を育てることが次年度以降の重要な課題でもある。経験しなければ身につかないことは多いので、生徒の指導や保護者対応、外部との連携など、これまでは50歳代教員が率先して実行してきたことを40歳代以下の教員に意識的にさせていく。

○中高収支改善計画の着実な実施と進捗管理

まずは学校ブランド力向上の妨げとなる奨学金依存型募集からの脱却を目指す。特に学業奨学金については、「それを狙って受験する生徒」がそれほど多くないという現実から支給基準を厳しく見直す。一方、部活動奨学金については、「これがないと集められない」という現実を立て慎重に検討し、徐々に基準設定の目安を引き上げたり対象の人数を減らしたりしていく。生徒数が減少しているのに開講クラス数が減っていないことに伴ってST比が小さくなりすぎていることに関しては、コースに多様性を持たせている以上、教職員数を減らして負担する授業数を増やす以外に方法はない。今年度、教職員の必要最少人数を試算し、それを年次ごとに減らしてきた。生徒への教育の質を落とさないよう十分に気を付けながら来年度以降も計画に従って実行していく。印刷費や光熱費などの日常的な経費節約も全員が心がける。

3. 小学校

（1） 光華一貫教育の創造

① 建学の精神に基づく宗教教育

SELの5つの要素を基盤とした「心の教育」を推進する。相手の立場を受け入れ、これからの多様な価値観で構成されている社会で力強く、柔軟に生きていく心を育む。また、宗教行事を通して、豊かな心、他人を思いやり、感謝・奉仕できる人間性を育てる。

○真宗文化研究所との連携を図り、宗教の授業（心の教育）の構想・実践を行う。

○教職員自らが仏教教育について理解し、実践につなげる。

② 幼・小・中・高・大の連携

○幼・小・中・高・大との連携を強化し、総合学園の強みを生かしながら宗教教育、英語教育、教育手法等、

それぞれのタスクフォースを積み重ねていく。

○幼・小・中・高の研究の柱を共有し、大学と協同して研究を深め、光華の教育手法を確立する。

○教育実習・インターンシップ・ボランティアなど大学の学生の学びの場として活用することにより、児童・学生・教員の活性化につなげる。

○小・中・高の連携による「校庭開放」「おおきに祭」を実施する。

③ 英語教育（国際理解教育）のブランド化

○言語活動の中でも英語を特化し、英語を学び、活用し、発達させるために、様々な取組（Koka English camp・校内Englishコンテスト・台湾・ハワイ等の国際交流）を行う。また、これらの活動を通して世界に目を向け、国際社会を理解するグローバルな視野を持つ子どもを育てる。

○各学年の英語プログラムを随時改善し、英語学習の充実・促進を図っていく。

○オーストラリア留学や国内留学（福島）のプログラムを充実し推進していく。

（2）教育研究体制・質の向上

① 教育体制・運営体制、研究体制のあり方

○教科担当制により、さらに授業の質を向上させ、高い学力を目指す。

○次世代のリーダーの資質として、「科学的思考に基づく探究力や創造力」「情報化社会を生き抜くためのICTスキル」が必要不可欠であると捉え、「STEAM教育」「ICT教育」を柱として強化し、さまざまな教育プログラムを実践していく。

○ロイロノート等、ICTを活用した授業をより一層の充実し、電子黒板やICTの効果的に活用による新たな授業スタイルの構築を推進していく。

○AIドリル（1年～6年）の導入による個別最適化な学びをさらに推進していく。また、漢検・英検・数検にも対応させ、各検定の取得率をUPすると同時に結果の分析と可視化を行う。

○本校の特色である「伝統文化教育」について積極的に外部へ発信していく。

○担任による放課後学習「がんばりっこ」により基礎力の習熟を図り、新しく設ける「ハイクラス講座」（4・5・6・年希望者に対する中学校受験対策講座）により発展的な学びを目指す。

○2026年に開催予定の西日本私学研究発表会にむけ、大学連携による、小学校の授業支援や教科研究・授業公開・研修会を継続実施し、研究発表会等を幅広く公開する機会を設定していく。

② 組織運営

○分掌等の組織の見直しと担当業務の明確化により業務を効率化し、機能する組織体制へとしていく。

○長期休暇中の自主的な研修の機会の確保と新たな研修制度の積極的な活用の推進し、教員の指導力向上を図っていく。

○アフタースクールの実施内容を充実させ、長期休業中の実施日を増加する。

③ 働き方改革に向けて

○学校体制を抜本的に見直し、組織のスリム化を図りつつ、会議時間の短縮を行い、業務推進しやすい環境を作っていく。

○常に働きやすい職場づくりを意識し、必要に応じて情報の共有を行いながら改善を図っていく。

（3）教育環境の充実

① ハード面、ソフト面での環境整備

○コモンスペースを有効活用し、ICT機器を積極的に活用した授業を展開し、新たな学びの姿を発信していく

○ライブラリー（図書室）の蔵書を魅力あるものにしていく。（大学生による読み聞かせの会の実施）

○各教科の教材を点検し、補充・充実していく。

(4) 経営・運営基盤の強化

① 志願者増・入学者確保につながる戦略的募集・広報活動

- 入試日程、イベント内容の見直しと充実により、より多くの志願者を獲得する。
- 幼稚園、保育園訪問を計画的に積極的に行っていく。特に幼稚園、保育園(年中・年少を対象に)一人でも多くの人に光華を訪れてもらえるような魅力的なイベントを計画・実践していけるように、教職員全員で協力して行っていく。
- 光華幼稚園(内部・弟妹)と小学校児童との交流活動も回数増や内容の工夫により、出願者増に繋げていく。
- 環境(施設・子ども・教職員)の魅力を伝える工夫を行う。
- 小・中・高入試広報部と連携し、今までにないスタイルのオープンキャンパスや学校・入試説明会を企画・実施していく。
- ホームページ、SNSに児童の活動動画等を積極的に活用し再生回数を伸ばす工夫を行っていく。
- 塾への訪問回数増や資料提供の工夫により、丁寧な情報提供を行う。

② 収支改善に向けて

- 迅速かつ的確な業務遂行をしていくために風通しの良いシンプルな組織を目指し、組織のスリム化を図る。
- 児童数に応じた教職員数の在り方を検討し、合理的かつ効率的なカリキュラム編成をし、人件費の適正化を図る。
- 根拠をもって何が必要であるのかを考え、予算執行にあたり、予算執行の厳格化を図る。
- 外部資金(補助金等)の積極的な獲得を目指す。

4. 幼稚園

(1) 光華一貫教育の創造

① 建学の精神に基づく宗教教育

- ・「向上心・潤いの心・感謝の心」という「光華の心」について全教職員で学び直し、共通理解をし、自らの言動について意識を高めることを通して、子どもたちにも「光華の心」を育てる。
- ・日々の保育の中で、一人一人の子どもに寄り添い、思いやりのある温かい心を育み、遊びを通して心身共に調和のとれた子どもの育成に取り組む。
- ・登降園時の親鸞童形像への挨拶や降園時の保育室でのお参りなどが、気持ちを込めて行えるように、年齢に応じた宗教教育を計画的に行うことや宗教行事を通して、仏教の教えに触れられるようにする。
- ・仏教幼稚園協会や大谷保育協会主催の研修会に参加して学ぶことで建学の精神への理解を深め、宗教教育を推進する。
- ・子どもの成長の姿を発信したり、学園の宗教行事や宗教教育の内容を発信したりすることを通して、保護者にも宗教教育の理解の推進と浸透を図る。

② 体験・探究型学習とEdTechを活用した新たな保育

- ・幼児期の子どもたちは、自らワクワク・ドキドキと心を動かし、五感を通して様々な体験を重ね、遊びを通して学ぶことが大切である。そのためには「やりたい」「不思議」「おもしろそう」と心を動かし遊びたくなる環境を整えていく。
- ・幼児期の体験・探究型の学びは、「自ら学び自ら考える力」を培い、小学校以降の学びの基礎となるものと考え。一人一人が意欲的に関わり、試したり、考えたり、話し合ったりすることのできる環境について、子どもたちの興味や関心を把握しながら探っていく。
- ・本物体験で心を動かす経験とともに、ICT機器を活用することで興味や関心を広げ一人一人の学びが深まるようにする。

(2) 教育研究体制・質の向上

① 魅力ある光華教育の構築

- ・2023年度は、「主体性と社会性の基礎を身につけ、学びに向かう意欲を備えた子どもを育てる」ことを教育目標に掲げ、保育内容や保育環境の見直しや改善に取り組んだ。特にJolly dayを1週間単位で行ったことで、子どもたちは、主体的に自分たちで見通しをもって遊びに取り組み、やり切った満足感を味わう姿が見られた。次年度もJolly dayの取組が充実するように教材や環境を考えていく。
- ・SEL教育を推進することで、自己を発揮しながら相手の思いにも気づき、折り合いをつけることができる等、自己発揮と自己抑制の調和がとれるような子どもたちを育ていくことが重要であるとする。人と関わる時に必要な、協調性やコミュニケーション能力、最後まで責任をもってやり抜く力を育ていく。子どもたち一人一人が意欲的に環境に関わり試行錯誤しながら遊び込む中で、成功体験や失敗体験を重ねやり切った満足感や達成感を味わい、また友達と一緒にする楽しさや面白さ、協力することの大切さを感じることで日々の生活を保証していく。
- ・光華幼稚園ならではのサークルタイム活動がより充実し、一人一人が自分の思いを伝え、相手の思いを聞くという経験が重ねられるようにする。言語活動の充実を図ると共に、そこで出てきた子どもたちのやりたい思いが実現できるようにしていく。
- ・子どもたちが魅力を感じ、満足できるような日々の生活や遊び、園行事、Jolly Day（異年齢保育）、Koka English（英語活動）、Campas mate（学園内連携）の取組を充実することで実現していく。子どもたちがその中で、諸感覚をフルに使って様々な表現活動を楽しむことのできる保育を実現する。
- ・定着しつつある大学や小学校のネイティブ教員と連携した光華ならではの「Koka English」の取組をさらに充実し、楽しみながら英語に親しむことを通して、子どもたちの人と関わる力や想像力、表現力を豊かにする。ブログや園だよりによる発信や参観等の機会を通して保護者への啓発活動も引き続き丁寧に繰り返し行うことで教育への理解を図る。

② 満3歳児保育の充実・拡大と将来構想

- ・満3歳児の実態を把握し、教育内容について精査し、4年間を見通した幼稚園教育課程を作成し、4年保育を確立する。
- ・保護者のニーズについても実態も捉え、ニーズに応じた受け入れ体制を整え、安心して任せられるように保育を強化する。
- ・2026年度の認定こども園移行を目指し、まず2024年度は2歳児接続保育を実施する。

③ 活気ある教職員体制づくり

- ・子どもたちのモデルである教職員は、常に笑顔で明るく元気で思いやりのあるやる気あふれる教職員でありたい。今年度も異動のある中で、笑顔の絶えない職員室とし、お互いに支え合い、高め合い、認め合える教職員体制を構築する。
- ・一人一人の教員が、自分の力を発揮して保育に取り組むと共に、「やりがい」や「働きがい」が感じられる職場体制づくりに取り組み、教員の達成感が得られるようにし、意欲的に保育に取り組めるようにする。
 - a 園務分掌を明確にする。
 - ・園部分掌を細分化し、分担することによりそれぞれの仕事内容がより明確になり、見通しが持てて誰にでもわかりやすくなるようにする。
 - ・仕事量ができるだけ偏らないように配慮し、互いに相談し合い、助け合える教員の体制により、「お互いさま」という気風をつくることによって、「光華の心」を実現していく。
 - b 教務、学年主任を中核としたチーム保育・異年齢保育の実践
 - ・学年主任を中心にして、新しい幼稚園の取組（早組・遅組の解消による登・降園時の保育）がスムーズに進められるよう、話し合いを重ねる。

- ・クラスでの活動の充実とともに、クラスの垣根を超えて同学年の横のつながりやJolly dayでの異年齢の関わりがより一層充実するように、それぞれがアイデアを出し合って進めていく。

C 向上を図るための自己目標やチーム目標の設定

- ・教員の学びたい意欲を大切に、自己目標・チーム目標を設定することで自己啓発の推進を図る。
園内においては園内研究の機会を定期的にもち、教員同士が学び合う環境づくりを行う。
- ・互いの保育を見合う機会をつくり、学び合うことで的確に子どもを理解する力を培う。気づいたことを出し合い、建設的な話し合いとし、保育力の向上に努める。
- ・園外への研修にも積極的に参加することで自分磨きを行うと共に、得た学びを園内に伝達研修を行うことで園の教育の更なる充実につなげる。学びの場や時を保障し、学び続けることのできる環境をつくる。
- ・一人一人の教員は、年度当初に自己目標を設定し実践をすることで自己PDCAサイクルを確立させるとともに、チームとして、園全体として設定した目標に対して実践状況がどうであったかも振り返ることが重要である。チームとしてそして園としてのPDCAサイクルを通して得られたことを共有し、改善につなげることで教育力の向上を図る。

(3) 教育環境の充実

①ハード面、ソフト面での環境整備

- ・子どもたちが主体的に遊ぶための保育環境について、常に話し合いを重ねることで共通理解を図り、保育環境の充実に努める。限られた園内環境であってもそれぞれがアイデアを出し合い、工夫することで環境を整えることができる為、そのことにより教員の主体性も培う。マンネリ化していないか、例年通りで実施していないかを確かめながら、ねらいをしっかりとち、ねらいに沿って必要な環境を整える。
- ・子どもたちと共に環境について考え、話し合いを重ねる中で子どもたちにとって必要なもの・こと・時・人について探っていく。
- ・修繕や改善の必要な箇所については、学園の担当部署に連携を取りながら改善に取り組むようにする。
- ・光華幼稚園ならではの園庭の広さや豊富な植栽等も生かしながら更なる環境の在り方について検討を重ねる。
- ・ICTを積極的に活用することで、在園児はもちろん、未就園児にもわかりやすい幼稚園教育の動画をスピーディーに配信することで幼稚園教育の可視化を推進する。
- ・同じ学園内の教育施設である幼・小・中・高・大・短である強みを生かし、これまで以上に教員同士、園児・児童・生徒・学生との連携を図り、人的な環境を最大限に活用することで、幼稚園教育の充実を図る。

(4) 経営・運営基盤の強化

①志願者増・入学者確保につながる戦略的募集・広報活動

a 全教職員による募集活動の実践

- ・学園運営部と連携し、他園の情報をキャッチするとともに募集戦略の見直しを行う。また全教職員で、募集活動の現状と課題の共有を行い、募集活動の年間計画を綿密に立て、教職員全員で取組活動を推進する。
- ・2歳児接続保育や認定こども園に向けて委員会を立ち上げ、それぞれが役割分担をし、情報を集め、広報資料を作成するなどして積極的に関わる。
- ・保護者のニーズを把握し、外部にアピールできるように教職員が協力して自分事として捉えて募集活動の取組みを進める。
- ・保護者が求められる情報（子育て支援活動、幼稚園案内等）を見直し、早め早めに対応ができるようにするとともに、誰にでもわかりやすいものが提示できるようにする。
- ・入園説明会や幼稚園見学の時期や時間帯を見直し、個別対応等、保護者のニーズを踏まえて柔軟に実

施をすることで就労保護者にも便宜をはかり、幼稚園教育の門戸を開くことを心がける。

- ・小規模保育園や児童館との連携を定期的に図ることによって光華幼稚園の情報を提供し、幼稚園に足を運んでもらえるような取組を引続き実施する。

b 100%入園を目指す親子保育の推進・・・安心安全な遊び場の提供

- ・幼稚園開放やワイワイキッズに加え、0歳児からの親子保育を開始し、子育て支援を行う。
- ・親子保育の場を活用し、在園児との交流の場を設けて幼稚園教育を知ってもらう機会とし、就労者の方であっても預かり保育の利用により、幼稚園教育を受けるが可能であることを園として、しっかりアピールしていく。
- ・年度当初の早い時期から2歳児接続保育について周知できるようにするとともに、いろいろな機会を通して、来園者に対して、定期的に幼稚園教育に触れてもらえる機会を設けたり、在園児との交流の機会を設けたりすると共に幼稚園の催しに参加してもらえるような案内を行う。
- ・親子で楽しめるような保育内容や学内連携による他校種の教員も交えて保護者支援を実施することで光華の強みをアピールする。（ミニ講演会やおしゃべり会、未就園児の保護者支援の充実）

c 就労家庭のニーズに寄り添う預かり保育の充実

- ・預かり保育教員（担当3名）による保育内容の充実を図り、年間を通して安心して預けられる体制をつくる。大学（こども教育学科）との連携の中で、インターンシップや授業内交流を推進することや学生ボランティアを募ることで、預かり保育の取組のよりよい活性化を図る
- ・課外教室（アフタースクール）の更なる充実と保護者への発信を充実することで満足度アップを図る。（体操教室・サッカー教室・ECCジュニア・バレエ教室・ピアノ教室・造形教室等）希望者には、小学生進学後の課外教室も継続的に実施する。

②小学校への内部進学者増につなげる幼小連携の充実

- ・全教職員が、光華幼・小・中・高一貫教育の内容を熟知することで、保護者に一貫教育の重要性を語れるようにする。
- ・連携主任教員を中心に、小学校との交流を年間計画に位置づけをし、互いの子どもたちにとって意味のある連携とする。特に園児にとっては小学校に親しみをもち、小学生との交流活動を楽しみにすることができるようになることは大変意義深いと考える。交流の場に保護者にも参加してもらうことで、取組の実態を理解していただき、内部進学につなげるようにする。
- ・同じ学園内であるからこそその強みを生かし、「非認知能力」をキーワードに幼稚園教育から小学校教育に見通しをもって取組み、光華幼稚園と光華小学校ならではの接続期充実のためのカリキュラムの作成を行い、大学にも関わってもらうことで理論づけられたより確かなものとしていく。

6. 学園事務局

（1） 中期計画「The Road to 2030－ACT1」の事業計画実施と進捗管理（KPI管理）

2024年度は、「光華ビジョン2030」実現に向けた中期計画「The Road to 2030 -ACT1」の最終年度となる。中期計画ACT1スタート直後に発生した新型コロナウイルス感染症拡大による影響を受け、初年度から計画に対する乖離が発生。全校園においての入学減少も大きな影響を与え、財政面での悪化が顕著となってきている。最終年度においては、しっかりと土台の再構築を図り、経営改善に向けた再スタートの年度として位置づけ、2027年度には黒字化が実現できる目途を立てる年度としたい。また、中期計画ACT1を総括するとともに、2025年度からのACT2における事業計画・収支計画の内容をしっかりと精査し、見直すこととする。合わせて、中期計画KPI（Key Performance Indicator 重要業務評価指標）についても再設定するとともに、管理フローの改善も図ることとする。2024年度の主な取り組みとしては、大短新学科・新専攻設置（作業療法専攻・歯科衛生学科）及び大学健康科学部二学部化（看護福祉リハビリテーション学部・健康科学部）初年度の安定した立ち上げと新棟光耀館の積極的な活用、小中高新教育の推進、幼稚園の新たな募集戦略強化とする。財政健全化の取

り組みとしては、学生生徒等納付金収入・補助金収入の増加策、人件費・施設設備費・奨学金の適正化、各施策の効果検証と予算配分見直し等が挙げられ、組織の縮小、廃止、統合等も行う。

(2) 2024年度事業活動収支の改善

学校法人は、絶えず教育の質の向上に取り組んでいくため、財務体質の強化を図り、健全経営を実現し、施設設備への適切な投資とFD・SDの積極的な取り組みを進めなければならない。本学園はこれまで各設置校園の教育の質の向上を図るため、時代のニーズに合致した教育改革を展開してきた。しかしながら、事業活動収支は2018年度および2019年度の黒字決算以降、2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止に対する対策や学園独自の経済支援、2021年度から2023年度は小学校・中学校新棟建設及び大学の新棟建設に伴う支出から、赤字決算となった。2024年度は、各校園、各学科（大短）の収支改善計画に沿った管理の徹底、各校園在籍者数に応じた教職員配置の適正化により人件費（労務費）の抑制及び予算管理の厳格化など、今後安定的な黒字経営が構築できる収支改善策を図ることとする。大前提は各設置校園における募集強化であり、全教職員一丸となって取り組むこととする。また学生生徒納付金および経常費補助金等の収入に見合った支出抑制策として人員の適正化を図る必要がある。

(3) 補助金・助成金と寄付金、資産運用益の獲得

採択型事業補助金等、補助金の採択に向けた調査・方策を機動的に発動し、申請することで大型の競争的補助金の獲得を図る。2023年度も改革総合支援事業補助金は採択されず、残念な結果となってしまったことを踏まえ、より一層の研究と実践が必要である。また、経常費（運営費）補助金、特別補助金においても、各校園・部署間での連携を強化し、補助金情報を的確に把握することで確実な補助金の獲得に努める。

光華ビジョン2030の実現を目指し、施設整備事業やICT促進、DX推進、各種教育改革などを目的に、卒業生や保護者、関連企業等有縁者の方々や教職員に対し、「華の煌き募金」を継続的に募る。また、資産運用については、その目標額を1.50%以上とし、リスクを抑えた安定性の高い運用を実施済みである。今後新たな投資を行う場合は、引き続き、運用資産ポートフォリオを策定したうえでの投資を基本とする。

(4) 事務局の組織再編と職員力の強化

学生、生徒、児童そして園児のために何が大切かを考える組織として、各部署のミッションを明確化し、その達成状況を管理する体制を構築する。特に人口減少による学生生徒等確保の重要性の観点から、各校園が掲げる入学者数目標達成のため、メリハリをつけた募集広報活動が行える組織構造にする。幼少期から成人を迎えるまでの各校園における学修支援や生活支援へのサポート、安心・安全であるべき教育現場を維持向上させるため、組織の統廃合を含めた再編も実施する。学園DX推進は活動開始2年を経過し、業務のデジタル化においては同窓生名簿管理システム導入、証明書発行業務効率化実施、ワークフローシステム第一段開始まで行った。2024年度は人事労務管理システム導入により、全教職員が業務改善を実感できる効率化を進めていく。

職員能力開発については、各所属目標と個人目標を経営・運営方針に沿ってそれぞれ再考する。そのうえで、成果を出すための徹底した進捗管理体制のもとPDCAサイクルを徹底する。個人に対してはその結果を業績評価制度（MBO）にて適正に評価すること、また職員研修制度の体形（全体研修・資格別研修・学外研修等）と内容を充実させること、双方により職員のパフォーマンスの向上を図る。

すべての業務遂行や目標達成に向け、教職員間、組織間、学校間におけるコミュニケーションを強化し、教職員の一体感を醸成する。

(5) 学園ガバナンス・コンプライアンスの強化

自然災害（地震・火災・水害・豪雨等）や感染症に迅速に対応できる組織・体制を強化し、BCPやマニュアルの整備の定期的な見直しを行う。さらに、適正な備蓄品を確保、全学的な防災訓練の企画・実施など、危機管理体制のさらなる改善強化を図る。

また、改正私立学校法（役員及び評議員の職務・責任の明確化、内部統制システムの整備、理事・評議員

会のスケジュールの変更等) および大学版ガバナンスコードに基づき、各種ハラスメントの防止、個人情報の保護・管理等法令改正内容に即した各学園諸制度・諸規定の整備・改定を適切に行う。あわせて内部監査機能の充実を図る。

(6) NPO法人(京都光華アカデミック&スポーツクラブ)の事業展開

京都光華アカデミック&スポーツクラブは、「専門指導者の下、学術・芸術・文化・スポーツ活動並びに幼稚園・初等・中等・高等教育における課外活動の指導」を目的としている。特にK+RunningClubの発展充実および幼小中高大の放課後活動への指導者派遣を行うことや、地域住民も巻き込んだ活動を展開していく。今後は、幅広い分野での指導を視野にいれた活動を行い、経営基盤の強化を図り、地域のプラットフォーム校として貢献することを目指して取り組む。

(7) 各種団体との連携

永続的な光華ファンとして支援いただけるよう、有縁者である同窓生や旧教職員との連携強化を図るための組織体制を確立し、交流の機会を増やす。そのため、本学の取り組み(学園行事・公開講座・講演会等)を定期的にHPに掲載する。また、各校園の保護者会組織との連携強化も図る。

Ⅲ. 施設・設備等整備事業

1. 施設整備計画

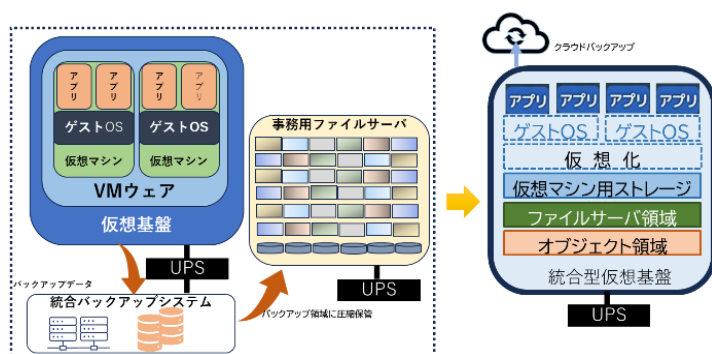
建物定期点検指摘事項改修
建物外壁赤外線検査(北・南校地全域)
5号館屋上手摺改修
建物漏水箇所整備

2. 設備整備計画

建築設備点検指摘事項改修
電気設備点検指摘事項改修
給排水設備老朽箇所更新(各種ポンプ・グリストラップ等)
空調機器老朽箇所更新
エレベーター設備定期更新
自動ドア設備定期更新
消防用設備定期更新(消火ポンプ等)

3. ICT教育環境の整備

「建学の精神」に基づき、多様で特色のある教育・研究を目指し、ネットワークやシステムの整備、各校園の BYOD に適した環境整備を継続する。今年度実施予定の仮想基盤およびファイルサーバのリプレイスでは、統合型仮想基盤（下図）を採用し、クラウドバックアップシステムを導入する。BCP 対策やランサムウェア攻撃対策に備え、重要なデータをより安全に保管し、有事の際には教育・研究・事務業務の早期再開が可能な環境を整える。また、ファイアーウォールやウイルス対策ソフトなど、これまでのセキュリティ対策に加え、電子メール標的型攻撃対策サービスの導入を検討し、学園内全体のセキュリティ強化とインシデント発生抑制を目指す。そのほか、Web 授業のための TV 会議システム契約を継続、Web 授業に適した LMS の調査、計画的な端末リプレイスの実施、補助金など外部資金の獲得を図る。加えて、ワークフローや勤怠管理システムの導入など、事務局 DX 推進の後方支援を行う。



ールやウイルス対策ソフトなど、これまでのセキュリティ対策に加え、電子メール標的型攻撃対策サービスの導入を検討し、学園内全体のセキュリティ強化とインシデント発生抑制を目指す。そのほか、Web 授業のための TV 会議システム契約を継続、Web 授業に適した LMS の調査、計画的な端末リプレイスの実施、補助金など外部資金の獲得を図る。加えて、ワークフローや勤怠管理システムの導入など、事務局 DX 推進の後方支援を行う。

IV. 2024年度予算

2024年度事業活動収支予算

(単位:百万円)

科 目			2024年度 予算 (A)	2023年度 予算 (A)	差 (A)-(B)
教育活動収支	事業活動収入	学生生徒等納付金	2,722	2,991	▲ 269
		手数料	27	37	▲ 10
		寄付金	17	18	▲ 1
		経常費等補助金	769	817	▲ 48
		付随事業収入	54	51	3
		雑収入	46	120	▲ 74
		教育活動収入計	3,635	4,034	▲ 399
	事業活動支出	人件費	2,703	2,765	▲ 62
		教育研究経費	1,629	1,630	▲ 1
		管理経費	246	308	▲ 62
徴収不能額等		3	4	▲ 1	
教育活動支出計		4,581	4,707	▲ 126	
教育活動収支差額			▲ 946	▲ 673	▲ 273
教育活動外収支	事業収入活動	受取利息・配当金	118	105	13
		その他の教育活動外収入	0	0	0
		教育活動外収入計	118	105	13
	事業支出活動	借入金等利息	24	15	9
		その他の教育活動外支出	0	0	0
		教育活動外支出計	24	15	9
教育活動外収支差額			94	90	4
経常収支差額			▲ 852	▲ 583	▲ 269
特別収支	事業収入活動	資産売却差額	0	0	0
		その他の特別収入	14	14	0
		特別収入計	14	14	0
	事業支出活動	資産処分差額	3	2	1
		その他の特別支出	0	0	0
		特別支出計	3	2	1
特別収支差額			11	12	▲ 1
予備費			20	30	▲ 10
基本金組入前当年度収支差額			▲ 861	▲ 601	▲ 260
基本金組入額			▲ 380	▲ 192	▲ 188
当年度収支差額			▲ 1,241	▲ 793	▲ 448
事業活動収入			3,767	4,153	▲ 386
事業活動支出			4,628	4,754	▲ 126
事業活動収支差額比率			-22.9%	-14.5%	-8.4%
人件費比率			72.0%	66.8%	5.2%